



Title	互酬性再考 : 儀礼交換の視点から
Author(s)	前川, 啓治
Citation	年報人間科学. 1984, 5, p. 165-184
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八四年二月〕
『年報人間科学』第五号 一六五頁〜一八四頁

互酬性再考

——儀礼交換の視点から——

前川啓治

互酬性再考

— 儀礼交換の視点から —

- 序 交換への視野
 - 一 互酬性の理論
 - 二 モカ交換
 - 三 儀礼交換と互酬性
 - 四 戦争と儀礼交換
- 結びにかえて

序 交換への視野

交換論の方法や関心対象はさまざまであるが、それらは三つの流れに大別できる。その三つとは、(1)社会心理学における交換理論、(2)社会学における交換理論、(3)人類学における交換理論である¹⁾。社会心理学的交換理論の代表であるホーマンズは、社会過程を扱いながら、究極的には社会行動を心理学的解釈に還元可能とする立場をとる。彼は、社会集団における「個人」という要素を実体視し、ある個人を分析の中心に据え、その上で集団の他の成員との交換に着目するのである。(従って必然的に交換の「動機」に注目する為、「感情」が重視されるのである)。交換行為のこのミクロの関係を扱うのは、チボー・ケリーやドイッチを中心とする実験社会心理

学の流れである。しかしながら、このような社会的脈絡コンテクストを重視しない(よって贈与という視点を持ちあわせていない)社会心理学的な方法論は少くとも、「現実」世界の具体的資料である民族誌の分析という関心とは重ならないと思われる。(ちなみに、未開社会における女性の交換に関する論争は、レヴィ・ストロースのシステム「規則」として捉える立場と、ホーマンズやシュナイダーの「動機」を重視する心理学的な立場との差違を明らかにしたが、R・ニードムはその著『構造と感情』において、ホーマンズ流の解釈の誤まりを指摘し、レヴィ・ストロースの構造論的解釈の優越性を論証している。レヴィ・ストロースやニードムにとつて、「感情」とはシステムとしての交換の付随的な結果として捉えられるものではないだろうか)。

さて、ホーマンズ以降交換理論の展開をより社会学的に展開したのはP・ブラウである。ブラウの交換理論には、贈与や互酬という観点もあり、また交換を経済的交換にのみ限定しないで社会的交換にまで拡大しようとする意図がある点、そしてホーマンズとは異なり、社会過程が個人行動に還元できないという立場を維持する点で関心が重なる。しかしながら、いわばジンメルの理論的継承者であ

るブラウウの目的は、「人々の間の社会的な association がどのような社会過程によるものかを説明すること、その為に単純な過程からはじめて複雑な過程に説き及ぶこと」²⁾なのであって、その際に、分析の端初カテゴリーとして社会的交換という観念を用いるということなのである。要するに、制度維持を軸とする構造—機能主義の社会構造論とは異なる、新たな社会構造論を構築する為のステップとして社会過程論を扱い、有効な分析手段として「交換」という概念を用いたのであった。デイレンマとその弁証法的発展という彼の社会過程論は社会構造の変動論そのものであった。しかしながら社会構造論への執着が、社会過程論の動態性に制限を加えているのは歪めない。

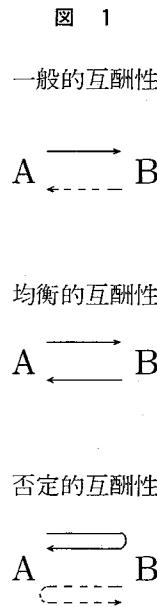
本論ではこうした社会心理学や社会学とは異なる人類学の交換理論の鍵概念である「互酬性」を検討することになる。

互酬性という概念は、基本的には二者ないしは二集団間の相互行為の分析ないし解釈の際求められる捉え方の枠組なのであり、人類学にあつては具体的なフィールド調査、観察、あるいはそれらを基にした民族誌の分析のプロセスの中から必然的に生まれてきたものと言えよう。本論では儀礼交換「モカ」に従つて「互酬性」を論ずることになろう。

一 互酬性の理論—人類学的交換論—

トゥルンヴァルトおよびマリノフスキーの互酬性の概念を受け、経済による社会の統合の一形態として互酬性を位置づけ、再分配と

市場交換に対比したのはポランニーであった。そして、主として市場社会以外の社会において社会の統合作用として働くこの互酬性の概念を、さらに発展させたのはM・サーリンズである。彼は、「市場とその付随物の仮定に基づいている、現代の経済学理論のすべてが原初経済には妥当しない」という点でポランニーに同調しながら、互酬性を「二当事者間の財の双方向的移転」と定義し、さらに未開社会における物質のフローを互酬性の三つの類型に分けている³⁾。(図1)



一般的互酬性とは「利他的と推定される取り引き、すなわち援助が与えられるというようなトランザクション、および、もし可能であり必要ならば「援助」が返礼されるというトランザクション」⁴⁾のことであり、「分かち合い」⁵⁾「もてなし」「無料贈与」「手助け」「気前よさ」のことである。従つて「親族としての義務」「首長としての義務」「高い身分に伴う(徳義上の)義務(ノブレス オブリージ)」などもこれに相当する。この型の理想型はマリノフスキーの「純粹贈与」である。

均衡的互酬性とは「直接的な交換」であり、厳密な均衡において

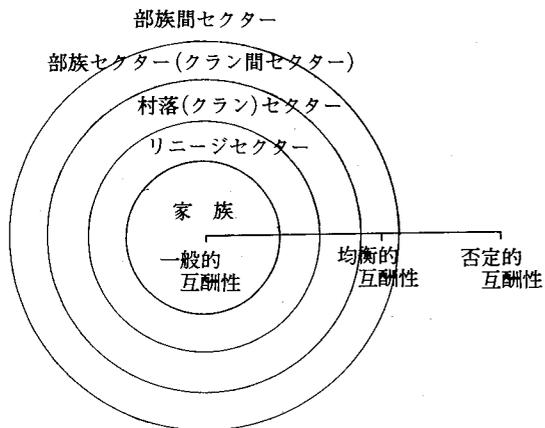
は「返礼は受け取ったものの慣例的等価物であり、遅延は起こらない」^①、言い換えれば、「限定された短い期間内の同等の価値ないしは有用性を持った返礼を規定するトランザクション」^②であつて、贈与交換、支払い、民族誌で交易と記されるもの、売買などは、原始貨幣も含め均衡的互酬性のジャンルにはいる。その理想型は、「同一形式のもの、同量の、同時の交換であり、民族誌においては特定の夫婦間のトランザクションや友好関係、和平協定において確かめられるものである」^③そして、「均衡的な互酬性は一般的互酬性より非人格的であり、……より経済的なものである」^④。

そして否定的互酬性とは、「罰せられることなしに只で何かを得ようとする試みで、占有の幾つかの形態であり、純粋に巧利的な優位性に向けて展開され行なわれるトランザクション」^⑤のことであり、「最も非人格的な交換の種類である」^⑥。その程度に依じて、物々交換、値切り、賭け、ごまかし、策略、窃盗、暴力、術策などのさまざまな占有がこれにあたる。

サーリンズは一般的、均衡的、否定的の各互酬性を、それぞれ連帯の極、中間点、反社会性の極と設定すると同時に、経験的には、各トランザクションが二つの極や中間点に直接あてはまるものではなく、二つの極を結ぶ線に沿ったどこかに該当するものとしている。そしてさらに、交換の様式^{モーフ}、つまり互酬性の何れかを決定するのは交換当事者間の社会的距離であり、「親族関係が近いときは一般的互酬性に向かい、親族上の距離に比例して否定的互酬性に向かう」^⑦ものとした(図2)。見取り図は親族—居住の一連のセクターとして

見ることができ、互酬性はセクターの位置に対応し、道徳性もセクターに対応して変化するものとなっている。

図 2
互酬性と親族—居住セクター



以上がサーリンズの互酬性の類型である。これによって未開の部族社会における交換の概観は与えられるのであるが、互酬性の定義自体が限定性を欠いていることにすぐ気づくであろう。そこでまず、ここでは「互酬性」という用語が意味するものを再確認することから始めよう。

まず「互酬性」ないし「互酬性の原則」という用語によって想起されるのが、実際に目に見える「行動様式」なのか、それとも「規則」や「観念」ないし「期待」なのか、という点である。言い換えれば、互酬性が指示するのは、「生きられた系」^⑧「現実」、プラクテ

イスのレヴェルなのか、それとも「考えられた系」の「観念」のレヴェルなのか、ということである。これらのレヴェルは、「行動様式」「規則」「観念」「期待」の順序で、現実的なものから観念的なものへと移行している。さらに、「互酬性の原則」の役割が「社会現象の叙述」なのか、「社会の構造と安定性の分析のモデルないし道具」^⑤なのか、ということがある。「叙述」に留めておく限り、ある特定の社会で観察される個々の現象や事象の様相の描写を明解にする為に用いられる。その際機能主義の見解（マリノフスキー）に従えば、互酬性の原則、つまりギブアンドテイクの原則は、集団の秩序、安定を維持する為に存在するということになる。この見解の危険性は、さまざまな現象や事象の様相が、社会の生存の為に存在すると単純に決定してしまうことである。さらにマリノフスキーのいうギブアンドテイクの原則は、「習慣」「実践」「義務」の何れを指すのか曖昧である。一方、社会の「分析枠組」として用いられる場合にも、モデルの内容は二通り考えられる。一つは「行動様式」についての「記述的」モデルであり、もう一つは社会の構造を説明する為の、「規則」についての「規範的」モデルである。これは互酬性概念の対応するレヴェルでは、現実のプラクティスのレヴェルと社会的規定性（規則）のレヴェルに対応している。

過去の互酬性に関わる理論を振り返るならば、「分析枠組」ないし「モデル」としての互酬性の原則に限定しても、その意味しているレヴェルも内容もさまざまである。M・モースはその古典的名著『贈与論』において、「贈与を行なう義務、贈与を受け取る義務、贈

与に対する返礼の義務」という一連の互酬の「義務」を示した。この場合の「義務」というのは規則の一種で強制力が生じる場合を指し、従って交換を「互酬性の義務」という時、互酬性は規範として捉えられているのである^⑥。グールドナーもまた「互酬性の規則」を普遍的なものと仮定するところから始める。「1、人は、助けてくれた人を助けなければならず、2、助けてくれた人を傷つけてはならない」^⑦というわけである。レヴィ・ストロースが自然と文化を区別する規準を「二項対立的構造の存在とその媒介としての交換」としたように、グールドナーは「互酬性の規範」をして、人間を自然から弁別する普遍的な文化と捉えているようである。その場合でも彼は、行為と義務を定める一般的、倫理的規範と、それに基づいて社会の成員が行なう交換の実践とは区別している。また、レヴィ・ストロースは、「互酬性の原則」を「行動形態」を表わすものとし、他者と自己との関係性を築きあげるものとしている。その際、行動の基底には無意識の精神構造があり、従って互酬性とは自・他という象徴的二項対立を統合する直接的形態とされるのである。さらにファースの場合は、「心理的強制」の原則として互酬性を捉えていると言えよう。

さて、サーリンズの互酬性の三類型に戻ろう。サーリンズの図式は少なくとも一般化を目指したものであるという点で、分析モデルと言えよう。では、モデルの水準は「行動様式」を指しているのか、それとも「規則」を指しているのか、あるいは、「観念」ないし「期待」を指しているのか。

一般的互酬性とは「利他的と推定されるトランザクション」であり、均衡的互酬性とは、「限定された短い期間内の同等の価値ないしは有用性を持った返礼を規定するトランザクション」であり、否定的互酬性とは、「純粹に巧利的な優位性に向けて展開されるトランザクション」ということである。トランザクションという表現を見る限り、「行動様式」を示していることになる。しかし「利他的」という表現は、むしろ「観念」を示しているのではなからうか。また、均衡的互酬性についての「……同等の価値ないしは有用性を持った返礼を規定するトランザクション」という表現は、行為を規定する「規則」ないし「規範」の第一義性に言及していることになる。巧利的な優位性に向け展開されるトランザクションという表現は、再び「観念」の第一義性を表わすものに他ならない。サーリンズにあっては少なくとも、互酬性の原則が観察可能な「行動様式」を示していることは明らかであるが、それを規定しているのは、一般的互酬性と否定的互酬性については「観念」であり、均衡的互酬性については「規則」となってしまうている。

互酬性の類型の図を見る限りでは、A、B二者間のトランザクション全体の形態を規準に分類した類型のような印象を与えるが、実際は二者のうち一方、すなわちAならA、BならBに焦点を合わせ、その主体における得失という観点から創られた類型なのである。この点を批判して、リブラはこう述べている。

「……第一にこれらの変数（親族関係上の距離、社会性、寛容性）が内包する質的に異なる価値に特に注意が払われているにも拘わ

らず、正の極から負の極へと移行する一次元的な量として変数が捉えられている。第三にサーリンズの図式は、単一行為者モデルに限られてしまっているが、互酬性の理論とは、無条件にA(B)の行為がB(A)の行為次第であり、同一行為者が同一の互酬的二者関係で寛容から貪欲、社会性から反社会性まで移行しうる相互作用のモデルなのである。」(傍点筆者)

つまりサーリンズは、AとBの二者関係のAならばAという行為者にだけ注目し、AからBへの互酬的トランザクションの後にAの保有する財の量が「一」になる場合を一般的互酬性、0の場合を均衡的互酬性、+になる場合を否定的互酬性としているのである。こうしたサーリンズの互酬性の類型を機能主義的な見方である（つまり、互酬性を経済的、社会的利益を最大限にする手段とみなしている）として、シュヴァインマーは記号論的観点の必要性を説いている。記号論的研究領域とは「特定の選り抜かれた社会形態または『制度』という脈絡の中で（多くの原理のうちから）互酬性の原理が発動される場合のすべての行為および言説」である。そして、「制度」の規則には「行動規定規則」と「構成規則」の二通りあるが、機能主義者は前者を扱い、記号論的研究で確立すべきは後者である^⑩としている。互酬性の原則が「行動様式」現実のプラクティスなのか、「規則」ないし「観念」なのか、という問題とここで再び重なり合う。サーリンズの類型そのものは確かに機能主義的であるが、彼自身は互酬システムの類型の際に、文化の意味の微妙さにも気を配っており、その為「行為」のレベルと、「規則」ないし

「観念」のレヴェルとが共存していたのであった。つまり彼は、「互酬性の観念」について、そしてそれが引き起こす『規則』について、さらに規則によって説明される『行為』について概略的に記したのである。¹⁰⁾

機能主義的方法というのは、インフォーマントによって述べられた行為や規則についてのディスクールを素材として、観念的規範、行為の規範、そしてそこからの逸脱について経験的一般化を行なうものである。この立場に立つマコーマックは、互酬性という概念がどのレヴェルを指すのか曖昧なまま用いられている点を指摘し、そういう状態で互酬性という用語が頻繁に用いられることに異議を呈し、互酬性という用語の使用の廃止ないし制限を提唱した¹¹⁾。しかしながら、この「互酬性」という概念自体に向けられた批判に対し、そうした互酬性の捉え方そのものが機能主義的な前提に基づいていることをシュヴィンマーは示したのである。さらにP・エケは、交換に関する機能主義的方法論と構造主義的方法論の差異を、イギリス、フランスに代表される知的伝統の違いにまで溯り、個人主義的伝統と全体主義的伝統に対応させた上で、交換や互酬性の分析枠組として、個人主義的社会的交換理論と全体主義的社会的交換理論の二つの潮流を浮かび上がらせた¹²⁾。個人主義的社会的交換理論とは、主として英米系の人類学者や社会学者に共有される方法であって、観察可能な(ないし実験可能な)経験的事象を重視するところから、必然的に交換の行為に関する個人的側面に焦点を合わせ、その「動機」を人間一般の性向に求めるのである。その際、動機には二通りあって、マリ

ノフスキーに代表される心理への還元を旨とする「心理学的個人主義」とフレイザーやブラウに代表される利得最大化傾向への還元を旨とする「経済学的個人主義」とがエケによって考えられている(ちなみにホマンズは両者の折衷と考えられている)。一方、全体主義的社会的交換理論はデュルムケムからモースを経てレヴィ・ストロースに至る、社会の全体性を重視する観点である。モースの言う「全体的社会的事実」としての贈与という視点、それを受けたレヴィ・ストロースの「構造主義」的方法論が端的にその立場を示している¹³⁾。

さてシュヴィンマーは、構造論的さらには記号論的研究では、「互酬性の原則」を「行動規定規則」ではなく「構成規則」として捉えることを明示した。構成規則とは、「生の事実」¹⁴⁾に対して『制度的事実』と呼ばれる、現象のカテゴリーの可能な状況¹⁵⁾と定義される。これはA・B二者間のトランザクションにおいて、AならA、BならBという一者ないし一集団だけに注目するのではなく、AとB二者間ないし二集団間ないし二項間の一連の相互に構成する互酬現象(A1B)の全体を捉え、しかもそのプロセス全体が普遍的な制度に基づいているという前提を示している。記号論的に言えば、二項の対立と、その対立に安定をもたらし、二項を統合する操作を互酬性の原則と捉えるのである。そして、互酬性の基本原則を制度的事実に基づく構成規則と見做すことは、必然的に互酬性の意味するレヴェルを(一応)確定することになる。二者ないし二集団を象徴のレヴェルで二項と捉えることは、レヴィ・ストロースの二項対

立的構造に言及していることになる。そしてこの二項対立とは精神の構造、つまり認識の構造のことであった。この精神ないし認識の構造は、文化に応じて多様な形状を呈するが、その存在については、文化の差異を超えて普遍的なものと設定されるのである。従って、互酬性の原則の土台は精神のレヴェルにある、つまり「互酬性の原則」という場合に意味されるものは第一に「観念」のレヴェルである、というのが構造—記号論的立場をとる者の基本的設定である。

前述のように、互酬性の「観念」は構造的二項対立に基づいているが、その際、二項A、Bには価値の差はなく、従って基本的にはA、B間には均衡的観念が存在している。この均衡的観念が制度を経由して実践のプロセスに至る場合ほどのような変形が行なわれるのか、また均衡的観念はサーリンズの均衡的互酬性と対応するの可否かについて、モカ／テ交換の民族誌に照らして検証を行ないたい。

ここまででサーリンズの互酬性の類型についての一つの問題点を整理した。残る問題は、三つの類型と親族—居住セクターの対応の図式である。図式によれば、主として一般的互酬性は家族に、均衡的互酬性は部族セクターに、そして否定的互酬性は部族間セクター—以遠の、未知なる世界に対応している。(均衡的互酬性の場合別のクラン同士あるいは別のクランの成員同士の交換ということになる)既に取り上げた互酬性の類型の問題を別にしても、三類型と親族—居住セクターの対応に関する反例の数々は民族誌のレヴェルで確認されている。例えばサリー・ブライスは、互酬性に対応するのが社会的距離と社会性であることは認めながらも、その変数は

親族と居住だけでなくもつと多様であることを、スリナムのサラマカ・マルーン(Saramaka Maroons)族とフィリピン^⑩のタウサグ(Tausag)族の民族誌に適用することによって検証した。さらにムーニは、ブリティッシュコロンビアのヴィクトリア近辺のインディアでバンド社会を形成しているコースト・サリッシュ(Coast Salish)族について検証を行なったが、必ずしもサーリンズの図式には馴染まなかったと報告している(もつともコースト・サリッシュは部族社会ではあっても、サーリンズが前提とした未開社会でないことはムーニー自身断わっている)⑪。

二 モカ交換

ニューギニア中央高地の西部の諸族には、地域によってモカ(Moka)ないしテ(Te)ないしティー(Tee)と呼ばれる儀礼交換が行なわれている。この儀礼では、氏族間や個人間で、生きた豚や貝や(場合によっては)石斧や羽毛などが贈与交換される。そしてそれらは、氏族と個人のネット・ワークに沿って、広い範囲にわたり、何回も、数年もかかって線状に振り子のように往復移動しており、この交換儀礼ないし儀礼交換システムをエンガ(Enga)族ではテと呼び、メルパ(Melpa)族ではモカと呼んでいるのである。(モカの儀礼では、交換に際して踊りや歌、演説などが行なわれ、集団同士の一大行事となっている)⑫。

「モカ」という語はメルパ族にとつて以下の内容を意味している。

一つは、「婚資を除く儀礼的交換シ、テムの複合体全体に対する一般的用語」である。また、二つ目には、「受け取ったもの以上の価値を持つ贈与物の儀礼的贈与のすべて」と特定される。厳密には、贈与におけるモカの要素は負債の過剰分の増加のことである。その他、集団の要望に応じて、婚資や子供の成長に応じた支払い、死の際の支払いなどの贈与のカテゴリーも、モカの機会として用いられる時もある。モカの種類を大別すると次の五つである。

(1) ビッグ・マンからビッグ・マンへの小規模の「援助」のモカ。
(2) 昔からの敵対集団同士の大規模なモカ。ビッグ・マンは新しい同盟の主要な参加者かつ保証人である。

(3) 過去に時折戦った敵対集団同士のモカ。相手の集団が投資に見合うか否かによってビッグ・マンの役割が定まる。

(4) クランの区分ないしクランのペア同士の大小の内部のモカ。ビッグ・マンの役割は重要である。

(5) 同盟集団同士の大規模なモカ。(2)の場合程ではないが、ビッグマンの重要性は、贈与の担い手としても交渉者としても顕著である。

(5)の形態がモカの中でも一般的である。次に(2)・(3)である。(5)はクランレヴェルでのモカ交換である。(2)・(3)は部族レヴェルないし、異なる部族に属するクラン同士のモカ交換である。

主要な贈与はたいいてい豚のモカである。パートナーが、通常接触のない「主要な敵」集団の場合には一、二匹の豚を受け取り手側集団全体に一まとまりの贈与として送る。すると受け取り手側はビ

ッグ・マンを中心にそれを集団内で再分配する。その際、与え手集団と受け取り手集団が同盟関係にある場合は個人のレヴェルでパートナーがおり、贈与の譲渡は公けの儀礼を通して行なわれるが、実際の授受関係は個人をベースに成立しているのである。モカの交換儀礼における贈与の実際は、与え手集団と受け取り手集団の立場が入れ替わる一連の連鎖である。数年の間隔を置いて贈り手と受け取り手が交代するのである。モカの贈与の規模の変動(ないし一連の贈与のルール)は以下の如くである。

局面Ⅰ AはBに x を与える。

局面Ⅱ BはAに $2x$ を与える。

ここまではAはBに x 分負債があることになる。

局面Ⅲ 次に、AはBに $2x$ を与える。

すると、BはAに x 分負債があることになる。

局面Ⅳ 次に、BはAに $2x$ を与える。

以下、同様。

つまり、増加分(贈与の量の差)だけが負債と見做されることになる。従って、モカにおける贈与とは、二つのパートナー集団間の各パートナー間の「交互の不均衡」^⑨という関係を形成する双方的(vice-versa)移転と定義されよう。

三 儀礼交換と互酬性

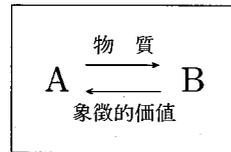
以下では、サーリンズの互酬性の類型に関する問題点をモカ交換

の民族誌に基づいて検証してゆきたい。

モカとは狭義には「受け取ったもの以上の価値を持つ物品の儀礼的贈与のすべて」であった。この狭義の定義をサーリンズの類型にそのままあてはめれば、モカ交換は一般的互酬性に相当することになる。では、モカ交換は「愛他的」交換の諸相を示しているのだろうか。否。交換の準備や儀礼においては、与え手側と受け取り手側の間に親しげで和やかな雰囲気はなく、贈与の授受の際などにはむしろ与え手側と受け取り手側の区別ないし対立が浮き彫りにされるのであって、サーリンズが一般的互酬性の特徴としているものとは異なる。それならば、均衡的互酬性なのだろうか、否定的互酬性なのだろうか。否定的互酬性でないことは明らかである。では均衡的互酬性に当たるのか。仮に、交換の対象を物質財に限定しなければどうであろうか。サーリンズ自身が交換の対象を物に限定していないことは読みとれるが、さりとて交換の対象を明確に区別しているわけでもない。モカ交換では、交換の儀礼に先立つ準備の段階で与え手集団と受け取り手集団の会合の際に、贈与する豚の数を与え手側のビッグ・マンが受け取り手側のビッグ・マンに告げると、受け取り手側はこう応答する。「与え手側はよくやった。しかしもつと威信を求めらるならば、約束の数を増やさなければならぬ」と。さらに、贈与物は儀礼に先立つて陳列され、贈与の質量は受け取り手のみならず、近隣に居住する人々にもみせびらかされるのである。こうした様相から互酬性概念に象徴のレヴェルの導入の観点が加えられる余地が生じてくる。つまり、互酬行為によって物質の価値が

象徴の価値に変換されるのである。より具体的には一回の贈与のトランザクション、すなわちAからBへの豚ないし貝の贈与による移転に応じて、「威信」ないし「名誉」という象徴的価値がBからAに移行すると考えられるのである。そして、象徴の指示する内容が

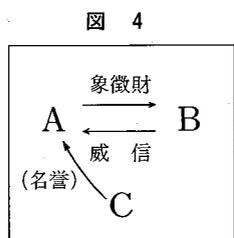
図 3



威信であることから、必然的に感情も包括することになる。その為、機能主義者が扱うように贈与に際してAないしBの個人的動機（感情）を中心に設定する必要性は当面退けられるのである。ではA—B間で、互いに逆方向に移転しあう物質と象徴は等価であろう

か。二つのものが等価であるかどうかを判定するには通常、尺度となるものがなければならぬ。然るに物質と象徴はレヴェルの違うもので、厳密な等価性はそもそも問えない。また、AからBへ贈与される物質自体が元来象徴性の高いものであることが指摘できる。モカの場合真珠貝は象徴財そのものであり、豚も食用財ではあるが通常食することのない貴重な財であり、象徴財としての側面は大きい。ということではモカの場合、互いに交換されているレヴェルは基本的に象徴のレヴェルだということである。象徴の価値というものは流動性をもつためその質量を固定することはできない。それらは、交換の儀礼におけるパフォーマンスによってそのイメージを拡大したり、あるいは手順のまずさによってそのイメージを軽減したりするものである。とすればモカにおける豚や貝などの象徴財は、より抽象的で一般的な象徴価値である威信ないし名誉を得る為

のものということになる。威信や名誉などという実体的ないものを所有することは、(稀少で貴重な)象徴財という具体的な形式を与えることによって可能となるのである。



先程の図3では交換の当事者はA、Bの二者であったが、こうしたモカのような交換の形態を、リブラは三者間交換という形態の一つとして捉え、「三者間サンクション」と名付けている。彼女によれば、それは「AがBとの関係のみならず、聴衆や裁決者の役割を果たす第三の集団Cによるサンクションを予想して、ないしそれに応じて、利益を得るか交換する」形態であり、「公平でない交換―過剰贈与や過少贈与―に対する補償はそうした三者間サンクションを通して得られる」²⁸⁾のである。これを三者間交換と呼ぶことは是非ともかくとして、この状況は交換の儀礼に演劇性を与えるものである。舞台の上の二者が、言葉のやりとりを含め、物の交換―トランザクションを演じるのである。以上のことから先程の図3は正確には次のように修正される。AからBへの象徴財の贈与に対しては象徴価値としての威信がBからAに移行する。さらに、象徴価値としての「名誉」が与えられるのは複数の第三者であるCを通してである。では、贈与を受けたBの観点から見るとどうであろうか。Bは財を受けとることによって、それに見合うだけの負債の立場にたつことになる。そして「互酬性の原則」である「構成規則」に従って、今度はBがAに贈与を行なう

ことになるが、その際Aから受け取った分以上を贈与しなければ、Bは「威信」を失い、「名誉」を失うことになるのである。

AとBの間に当初から著しい地位や威信の違いがある場合を除いては、AとBの間には均衡の観念が存在しているであろう。モカの贈与のプロセスは以下の通りであった。I、AがBにxを与える。

II、BがAに $2x$ を与える。III、AがBに $2x$ を与える。IV、BがAに $2x$ を与える。以下同様。少なくともモカ交換の生じる二者間では、マリノフスキーの言う「純粹贈与」を理想型とする一方向的な贈与

の観念は全く見出せない。むしろ、自己と他者の間に均衡の観念が前提としてあるからこそ、贈与行為によって与え手は、財の代わりに「威信」や「名誉」が与えられるのである。そうした根拠がなければ、豚と真珠貝の贈与交換というモカ儀礼を通して、威信の獲得を目指すビッグ・マンの存在はそもそもありえないのである。

さて、モカ交換は、サーリンズの言う均衡的互酬性にそのまま妥当するわけではないが、交換の領域に象徴のレヴェルを包括する視野があれば、一連のモカ交換のうちの一つのトランザクションについて言及しても、ゆるやかな等価性は考えられた。つまり均衡の観念は維持されることが明らかとなったわけである。ところで、モカ交換が均衡的互酬性で捉えられるならば、一般的互酬性とはどういう状況を指すのであろうか。サーリンズの言うように、互酬トランザクションの後に、与え手側の財の保有量が「マイナス」になる場合という定義では、モカの贈与が一般的互酬に相当するという理論的誤謬に陥ってしまう。一つの交換行為が一般的互酬であると同時に均衡的

互酬であるというのでは互酬性の類型の意味が全くなくなってしま
う。この矛盾を逃れる為に、さらに幾つかの理論的補強がサーリン
ズの図式には必要である。

サーリンズは一般的互酬性を主として家族セクターに対応させた。
しかし、そもそも彼は家族などの中心性を持つ集団においては、内
部関係である「集中」が支配的形態であるとし、間関係であるところ
の互酬性とは区別していたのである。ところが彼は、さらに発生
論的見地から「集中」や「再分配」を互酬性の一つの形態と見做
すことになってしまふ。彼の一般的互酬性とは、この集中のこと
に他ならない。この集中を均衡的互酬性や否定的互酬性と同じレ
ヴェルで捉えようとして、彼は一般的互酬性という名称を与えたの
であるが、既に述べた通り、集中とは内部関係の形態を指し、互
酬性とは間関係の形態を指すのであって、両者は別のものなのであ
る。この差異を明らかにする為には、インタラクティオンモードの観
点が有効である。

社会的な相互行為として交換を捉えた場合、利害が対立する二集
団間の「トランザクション(相互交換)」様式を指すものと見做す従
来の見解に対し、F・バースは、相互行為の様式として、トランザ
クションモードには解消されないモード、すなわち一方の集団だけ
ではなく、両集団の当事者すべてに価値が向けられる「インコーポ
レーション(統合)」モードを定義づけることを提唱した³⁰。さらに
これを受けて、このインコーポレーションモードをトランザクショ
ンモードと並置される対概念とし、各々の交換の様式の特徴を列記

したのはR・ペインであった。

さて、家族のような親族関係の距離が至近の小規模集団では、成
員の親密さは所与のものである。こうした集団では、集団の成員同
士の類似性を増大させ、共通の文化的同一性を維持させる「統合
的モード」||「Iモード」が交換行為の支配的モードとなる。一方、
リニージ同士、クラン同士、部族同士というように、規模が拡大さ
れるにつれ利害が増々対立する集団レヴェル同士の交換では「相互
交換的モード」||「Tモード」が支配的モードとなっている。これを
象徴のレヴェルで捉え直せば、Iモード交換が成立している社会的
領域では、二者間つまり二項間の対立が曖昧であり、むしろ二項の
差異性が否定ないし抑制されているのに対し、Tモード交換が成立
している社会領域では、二項間の識別、対立が明らかであって、構
造論的立場では)この対立した二項間を媒介する操作が交換という
ことになる。

集中が互酬性とは基本的に異なる集団関係の脈絡であるからに
は、集中の言い換えとして「一般的互酬性」を用いることは妥当
ではない。ただ、一般的互酬性で集中でないケースも考えられる。
それは絶対的な富の保有者から恒常的な富の不足者へのさまさまの
贈与である。原理的には片方の者ばかりに「借り」がたまるのであ
るが、誰もその貸借の均衡を気にとめない関係。サーリンズも挙げ
ているノブレス・オブリージなどがその例である。ところがこうし
た例は最初から二者間に地位や権力、財に不均衡が生じているとい
う前提があり、むしろ中心性を持つ集団内の集中行為の変形と解

されるのではないだろうか（モカにおいてはビッグ・マンとその従者の関係などに相当しよう）。また、これとは逆に、家族成員間以外にもIモード交換が成立する状況は考えられる。親族―居住距離が近くなっても、遠路からの客や不意の客をもてなしたり、病人や怪我人を助けるということは存在するのである。しかしながらこの場合も、もてなしたり助けたりするのは全く当事者の愛他精神に頼らざるを得ないのであり、また未開社会のように人の移動が少なく、比較的流動性の小さい社会状況では、見知らぬ人が行き来することは滅多にないのである（未知なる人々は、こうした社会にとつて常に有徴項なのである）。基本的に家族内の「集中」を中心としたこの相互関係性を「愛他性」⁽²⁾「社交性」⁽³⁾と呼ぶのに従えば、サーリンズの一般的互酬性は「愛他的互酬性」とされよう。しかも、この用語を用いれば、互酬性という概念が「期待」や「観念」のレヴェルを第一に指し示すというニュアンスはより明瞭になる。

モカ交換は時には部族間で行なわれるが、最も頻繁には克蘭間で行なわれるものである。克蘭は、サーリンズの互酬性の類型によれば、「均衡的互酬性」が成立する位置にある。しかしモカ交換における物の移転がむしろ均衡的でないことは既に述べた通りである。克蘭セクターに対応するのはあくまでも均衡の観念なのであって、従つて、象徴のレヴェルまで交換対象を上げた場合に均衡性が維持されるのである。そこで成立する交換のモードは主としてTモードであり、Iモード状況が成立している一般的互酬性―愛他的互酬性とはそもそも交換の成立する状況が基本的に異なるのである

（しかし、モカ交換が単なる均衡的Tモードとして独立して存在するわけではないことを明らかにしなければならない）。

四 戦争と儀礼交換

戦争の基本的な型式を示すにはまず基本的な識別が必要である。

一つは主要な昔からの敵と小敵の区別。もう一つは「戦争の当事者」とその同盟者の区別である。そして次の六つの点が指摘される。(1)特に大きな部族を除いては、通常部族内では主要な敵対関係はない。(2)一つの部族は別の一つの部族を昔からの主要な敵として持つことがしばしばある。(3)部族はペアになっていることが多いので、ある部族のペアと別の部族のペアが敵対することになる。ペアを形成する二つの部族が同盟の関係を結んでいる場合は、戦争が終結した際に、同盟集団に対して損失を償わなければならない。また戦闘の際にも、部族のすべての克蘭が巻きこまれるわけではない。(4)部族内、ペアを形成する部族同士、克蘭同士では小規模戦しか起こらない。小規模戦では、敵方を破滅に導くということはない。領地を追い払われるといつても一時的なことであるし、むしろ終結の際には和解が行なわれ、各々殺戮の償いが行なわれる。(5)こうした小敵同士が、主要な敵に対する闘いの際には同盟を結ぶということはある。小敵同士が戦争の賠償をするには二つの事情がある。相互の殺戮に対する直接の償いと、主要な戦いの際の互いの協力に対する賠償である。(6)ペアを形成する克蘭が互いに争うことは通常

あり得ない。このペアは戦時の同盟の中核をなすものだからである。いま、ある一つのクランがあるとすると、このクランに対する関係性によって、ある別のクランを類型化すると以下のようなになる。

(1) ペアクラン

小規模の戦いでも主要な戦いでも信頼すべき同盟である。

(2) 小敵のクラン

共通の主要な敵に対する戦闘の際の同盟となる場合がある。

(3) 主要な敵のクラン

このクランとは直接的軍事同盟はないし、間接的なそれも稀である。

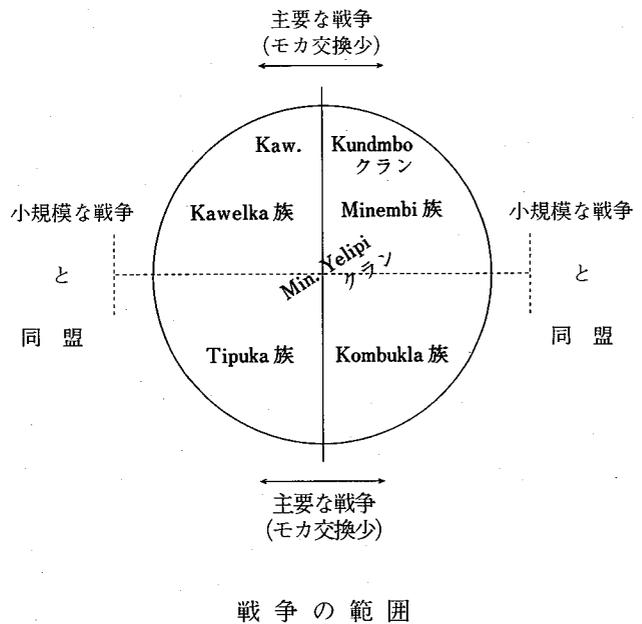
(4) 中立のクラン

戦争に影響のある地域外に位置する。戦いが大規模な場合は、時にはどちらかの側に物質的見返りを前提として協力する。しかし、大方は中立的である。

(1)と(2)に属するクランとは婚姻関係が頻繁に成立し、(3)と(4)に属するクランとは殆んど接触することはない。

図5は、北部メルパ族の部族のペアであるTipuka-KawelkaとKombukla-Minembiに関する戦争の関係を図示したものである。左右には主要な戦いが存在し、上下には小規模の戦いと同盟が並存する。Minembi部族のYelipiクランは、主要な敵の部族ペアであるTipukaの「クラン」と、Kawelka部族のKundmboクランはMinembi部族の別の「クラン」と各々ペアを組んでいる。Tipuka-Kawelka部族とKombukla部族の間にはそうした関係を維持するクランはなく、

図 5



従って、この部族間ではモカ交換も殆んど行なわれないという事実がある。モカ交換が頻繁に行なわれるのは、小敵—同盟関係を維持するクラン同士である。

また、戦争の賠償支払いはモカ交換に移行する最も重要な給付なのである。これには二つあって、敵対する集団の成員の殺害に対する支払いと、自集団の為に戦死者を出した同盟集団に対する支払いである。何れの場合も、犠牲を生じた敵集団ないし同盟集団が手始

めの贈与という形で、殺傷の責任とされた集団へ給付を行なうことから始まる。その際のやりとりは象徴的である。死者の出た集団の成員がやってきて、こういうのである。「お前達は我々の仲間を殺した。しかし実際に食ったり味わったりしなかった。それで我々はこの料理された豚を持ってきたので、食って、心地よくなって、賠償を支払うがよい」と。受け取った側の集団は数か月のうちに、主要な贈与(Waupeng)という形で賠償支払いをせざるを得なくなるのである。そして以後永続的に交換が繰り返されてゆくのである。交換の開始機構はこうして、内面化された互酬性^⑤や心理的強制^⑥といった人間の自然的性向にのみ求められるのではなく、(既に生じていた)戦争の賠償支払いという社会的プロセスの中に求められるものなのである。

これをインタラククションモードの観点から見れば以下のようになる。最初のモカの儀礼では二者間のIモードに基づく交換が行なわれ、その後、モカのパートナーの間で一旦互酬性の規範が働き出すと、相手から受け取った分より多くの豚や貝を返報しようとする機構が働き出し、儀礼的交換は競争的なものとなり、一連のモカの儀礼における相互行為も、Iモード中心からTモード中心へと変化していくのである。

地域集団間の物理的な力の究極的な均衡・不均衡が決定されるのは戦争によるのであるが、競争心や攻撃性が表明されるのは儀礼的交換においても然りである。交換は、自己の威信を強化するというビッグ・マンの興味を示している。モカと戦争は集団と個人の勇し

さを主張する二通りの手段なのであり、非日常的時空での現象としても共通性を持ち、互いに変換が可能なものなのである^⑦。

結びにかえて

以上のモカ交換と戦争の考察から、サーリンズの互酬性の類型では儀礼的交換を捉えることが出来なことが明らかとなった。そもそも交換現象は動態的^⑧なものであり、サーリンズの静態的^⑨な互酬性の類型、そして(彼自身が言明しているように)形式的な類型ではその現実を捉えきえることはできない。サーリンズの図式の欠点は儀礼・祝祭という観点、換言すれば聖／俗ないし非日常／日常の観点が欠落していることである。非日常的時空での現象ということであれば、(サーリンズの図式で)均衡的互酬性に対応するはずの部族セクター(つまりクラン同士)で、否定的互酬性(戦争)が生じているのである。では、クラン同士の交換は均衡的互酬性に妥当するのかというと、これにも問題がある。均衡しているのはあくまで「規範」ないし「観念」なのであって、実際には儀礼交換において、名誉を獲得する為に、均衡を上回る贈与交換が行なわれているのである。この状況を機械的に互酬性の類型に適用するならば、モカは一般的な互酬性になってしまふ。しかし、モカ交換は決して愛他的互酬ではなく、むしろ競争的儀礼交換なのである。ここから、儀礼的な公式の交換に関する限りは、サーリンズの互酬性の類型は妥当しいと言えるだろう。ただ、(非日常的)儀礼的集団トランザクション

を除外すれば、サーリンズの図式も妥当性が無いわけではない^②。ただし、その場合もいくつかの修正が必要である。まず、一般的互酬性について。これは基本的にはシェアリングを行なう小規模な共同体での「集中」^{アイリッシュ}の関係である。親族—居住セクターでは家族に相当するが、これは中心性を持つ集団であり、互酬性に分解しても意味がない。(克蘭セクターでの労働援助など一見一方的贈与に映るものも、実際には「均衡」の観念を前提とした互酬性である) 一般的互酬性という用語を廃止して、集中^{アイリッシュ}ないしシェアリングという用語を用いる方がよいであろう。最も妥当と思われるのは、バースとペインの「統合的モード」^{II}「Iモード」交換という用語である。これは「愛他的互酬性」のように一者に注目するのではなく、二者間の関係全体を指す概念である。次に、均衡的互酬性である。サーリンズは交易などを挙げているが、交易においては値切り(否定的互酬性)が行なわれる。また、交易は克蘭間のみならず部族間のセクターで行なわれる場合も多い。とは言つても、「均衡」の観念は明らかに存在するし、対応する親族—居住セクターが部族セクターであるというのもおおむね正しい^③。Iモード交換に対して、「相互交換的モード」^{II}「Tモード」交換という用語が該当しよう。そして最後に、否定的互酬性については未知らぬ者同士のトランザクションである、と定義するにとどめよう。

統合的互酬性(Iモード交換)、均衡的互酬性(Tモード交換)、否定的互酬性、が互酬性の類型の新たな用語として適切であり、親族—居住セクターとの対応はサーリンズの図式に妥当するものとする。

ただし、この類型と図式は、儀礼的な掛けのトランザクションにはあてはまらず、専ら個人間のトランザクションに該当する、という限定を付してのことである。さらに、互酬性という時、それは何よりも観念や規範のレベルを指示しているということも忘れてはならない。

最後に、親族—居住セクターに対応して交換される財が異なっていることを指摘しておこう。モカ交換の行なわれている克蘭の内、とりわけシェアリングの行なわれる家族セクターにおいては、タロイもやさつまいもやその他の野菜などの食糧つまり生計財^{サウンスワズ}の交換が行なわれる。パンダヌス油や装身具といった奢侈品は、克蘭間の個人同士で均衡的互酬に則って交換される。そして、(主として)克蘭集団同士のモカ儀礼において交換されるのは豚と真珠貝である。この場合も交換の前提には「均衡」の観念が存在している。その上で、豚と貝という象徴財を駆使して、「均衡」を上回る贈与を行ない、威信と名誉という象徴的価値の獲得を行なうのである。均衡分を超える象徴財は象徴的価値に変換され、返報されるといふコードが存在しているのである。以上のように、生計財、奢侈財、儀礼(象徴)財の三つの財は、各々別の交換領域^{エクスチェンジ領域}を形成しているという点が重要である。

注

(1) 塩原 一九八〇。

(2) 同論文 一〇九頁。

(3) その際、彼は集中を再分配と共に「中心性を持つ物質の移動」とは見做しているが、何れもその発生は互酬性にあるものとし、集中ないし再分配を互酬性の一つの組織として互酬性の下位体系にしておき、これを集中や再分配を、各個別の二者間のトランザクションの総和として捉える見方である。しかし、そうした見解は、部分の総和が全体であるという素朴な実体論に陥いることになる。

(4) Sahls 1974 pp. 191-196.

(5) *ibid.*, p. 198.

(6) MacCormack, 1967, p. 89.

(7) この強制力について、彼は交換される「物の霊」に求めている。

(8) Gouldner, 1960, p. 171.

(9) Lebra, 1975, p. 552.

(10) Schwimmer, 1979(a), p. 272.

(11) *ibid.*, p. 271.

(12) MacCormack, *op. cit.*, p. 90, p. 101.

(13) エケ、一九七四。

(14) 「構造主義」は、同じ社会の「構造」を対象とする場合でも、ラドクリフ・ブラウンらの構造機能主義とは異なっている。後者が経験的観察によって得られる社会構造の表層しか捉えないのに対し、前者は集合的社会現象の理解の鍵がすべての人間精神の集合的屬性の内に存在すると見做し、人間精神の構造の投影である社会的事象と社会的構造の解明を指すのである。

(15) Schwimmer, 1979, p. 272. この定義は (Searle, J. R., *Speech Acts*, 1969.) に拠っている。

(16) Price, 1978, p. 340.

(17) Moony, 1978, p. 333, table 2.

(18) モカ／テの儀礼交換の総括的分析を「儀礼的交換——ニューギニア高地モカ／テ交換システムを中心に——」(拙稿、未発表)で行なっているので、ここではモカ／テ交換システムのミクロの側面、すなわち交換シ

ステムの一部を占めるメルバ族における二集団間の儀礼的トランザクションの側面の要点だけを簡略に示す。

(19) Strathern, A., 1971, pp. 222-223. ストラザーンはバイトスのシスモジェネシス (schismogenesis) という考え方を基にして「交互の不均衡」という用語を適用している。

(20) Lebra, *op. cit.*, p. 560.

(21) Barth, 1966, p. 27. しかしながら、バース(ト)自身はそれ以上インコーポレーションモードについて具体的に展開することはなかった。

(22) Paine, 1976.

(23) Befu, 1977, p. 257.

(24) Lebra, *op. cit.*, p. 552.

(25) Gouldner, *op. cit.*, pp. 176-177.

(26) ブラウ、一九七四。

(27) 戦争と儀礼交換の関連に関し、儀礼的時空での威信の獲得を媒介とした循環的モデルが考えられる。これについては前述の拙稿「儀礼的交換——ニューギニア高地モカ／テ交換システムを中心に——」で展開している。

(28) サーリンズに関する上野論文一九七九は、ポランニーを念頭に置き、近代社会をも対象とする開かれた交換論の視野を有している。ただ、サーリンズは基本的には未開社会を対象として互酬性の類型を考えているのであり、その際の彼の記述はむしろ慎重である。例えば彼は、互酬性を「対称的」な二者間の双方向的移転」とは厳密には断定していない。ポランニーの用語に相当させれば、「互酬性」(『対称的な双方向的移転』にあたるであろうと触れただけなのである。事実、サーリンズは対称的でない交換に言及して一般的互酬性としている)。

(29) モカ以外の公式の交換形態は婚資と交易である。モカと婚資に用いられる主要な対象は豚と貝であるが、交易のそれは斧、油、塩である。交易と儀礼的交換の違いは、前者が、無関係の者の間で行なわれる即時的な異なる財の交換であるのに対し、後者は、恒常的な関係性を有する二

者間の時間差のある同一財の交換という点である。前者は有用物の入手に焦点があてられるが、後者は関係性そのものの創出に焦点があてられるのである。

BIBLIOGRAPHY

- Barth, F., *Models of Social Organization*. London: 1966.
- Befu, H., 'Social Exchange', *Annual Review of Anthropology*, Vol. 26, 1977.
- Blau, P. M., *Exchange and Power in Social Life*. New York: 1964. (コーター・M・ブラウ、『交換と権力』間場寿一、居安正、塩原勉、共訳、新曜社、一九七四)
- Brown, D. J. J., 'The Structuring of Polpa Feasting and Warfare', *Man*, Vol. 14, 1979.
- Bus, G. A. M., 'The Te Festival or Gift Exchange in Enga', *Anthropos*, Vol. 46, 1951.
- Davis, J., 'Forms and Norms: The Economy of Social Relations', *Man*, Vol. 8, No. 2, 1972.
- Ekeh, P. P., *Social Exchange Theory*. London: 1974. (コーター・D・エケ『社会的交換理論』小川浩一訳、新泉社、一九八〇)
- Firth, R., *Themes in Economic Anthropology*. London: 1967.
- Gouldner, A. W., 'The Norm of Reciprocity: A Preliminary Statement', *American Sociological Review*, Vol. 25, No. 2, 1960.
- , *The Coming Crisis of Western Sociology*. New York: 1970. (A・W・グールドナー、『社会学の再生を求めて』岡田直之、他訳、新曜社、一九七八)
- Gregory, J. R., 'Image of Limited Good, or Expectation of Reciprocity?', *Current Anthropology*, Vol. 16, No. 1, 1975.
- 橋爪大三郎、『大洋州の交換経済』Miemeo, 1981.
- Homans, G., *Social Behavior: Its Elementary Forms*. New York: 1961. (ホームマンズ、『社会行動—その基本形態』橋本茂訳、誠信書房、一九七
- 八)
- 久慈利武、『日常生活における交換行為』、『社会学』、日本評論社、一九七八。
- Lebra, T. S., 'An Alternative Approach to Reciprocity', *American Anthropologist*, Vol. 77, 1975.
- LeClair, E. Jr. (ed.), *Economic Anthropology*. New York: 1968.
- Lévi-Strauss, *Anthropologie Structurale*. Paris: 1958. (クロード・レヴィ・ストロース、『構造人類学』荒川幾男、他訳、みすず書房、一九七二)
- MacCormack, G., 'Reciprocity', *Man*, Vol. 2, 1967.
- Malinowski, B. K., *Argonauts of the Western Pacific*. London: 1922. (マリノフスキー、『世界の名著』マリノフスキー、レヴィ・ストロース、泉靖一編、中央公論社、一九六七)
- Mauss, M., 'Essai sur le Don', *Sociologie et Anthropologie*, 1922. Paris: 1968. (M・モース、『贈与論』、『社会学と人類学』有地亨、他訳、弘文堂、一九七二)
- McDowell, N., 'It's not who you are but how you give that counts: the role of exchange in a Melanesian society', *American Ethnologist*, Vol. 17, No. 1.
- Meggitt, M. J., 'Pigs are Our Hearts', *Oceania*, Vol. 44, No. 3, 1974.
- Mooney, K., 'Social Distance and Exchange: The Coast Salish case', *Ethnology*, Vol. 17, No. 4, 1978.
- Needham, R., *Structure and Sentiment*. Chicago, 1962. (R・ニーナム、『構造と感情』三上隆十訳、弘文堂、一九七二)
- Paine, R., 'Two Modes of Exchange and Mediation', *Transaction and Meaning*, Kapferer (ed.), Philadelphia: 1976.
- Price, S., 'Reciprocity and Social Distance: A Reconsideration', *Ethnology*, Vol. 17, No. 3, 1978.
- Sahlins, M., 'Poor Man, Rich Man, Big-Man, Chief: Political Types in Melanesia and Polynesia', *Comparative Studies in Society and History*, Vol. 5, 1963. (バーミンガム・D・サーリンズ、『プーマン・リッ

- チ・マン、ビッグ・マン、チーフ——メラネシアとポリネシアにおける政治組織の類型』、『進化と文化』、山田隆治訳、新泉社、一九七六。
- , 'On the Sociology of Primitive Exchange', *Stone Age Economies*. London: 1974.
- Schieffelin, E. L., 'Reciprocity and the Construction of Reality', *Man*. Vol. 15, 1980.
- Schwimmer, E., 'Reciprocity and Structure: A Semiotic Analysis of Some Orokaiva Exchange Data', *Man*. Vol. 14, 1979. (a)
- , 'Feasting and Tourism: A Comparison', *Winner*, I. P., *Unilateral Sebeek*, J. (eds.), *Semiotics of Culture*. Hague: 1979. (b)
- 塩原勉, 「交換理論」、『現代社会学』別冊六号、総合労働研究所、一九八〇。
- Strahern, A., *The Rope of Moka: Big-Men and Ceremonial Exchange in Mount Hagen, New Guinea*, Cambridge: 1971.
- , 'Finance and Production: Two Strategies in New Guinea Highland Exchange System', *Oceania*. Vol. 40, 1970.
- 上野千鶴子, 「財のセシオロジ」、『現代社会学』六卷一号、一九七九。
- 上野千鶴子, 「交換のコード・権力のコード」、『経済評論』三〇巻一〇号、一九八一。
- 山本泰, 山本真鳥, 「消費の禁止／性の禁止——(一)・(二)——サモア社会における交換システムの構造」、『東京大学新聞研究所紀要』二九号、一九八一—一九八二。
- 吉田正紀, 「ニューギニア高地の豚祭り」、『史苑』三三卷一号、一九七三。